着　任　挨　拶

■ 分子生物薬学分野　教授
白根 道子

2017 年 5 月より、今川正良教授の後任として分子生物薬学分野に着任いたしました白根道子と申します。薬学研究科のために、研究と教育に邁進したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

自己紹介がてら、私の学歴・職歴・研究歴を含めた履歴を述べさせていただきます。実は私は学生時代、特に研究者や教育者を目指していたわけでは無く、むしろ何がしたいのかどう生きるべきかをあまり真剣に考えずに過ごし、その不徳のせいで波瀾万丈とまではいきませんが紆余曲折を経験し、反省と軌道修正を繰り返しながら今日に至ります。

私は大阪大学理学部を卒業しました。大学の研究室配属では RecA を発見された小川英行先生の下で「遺伝子の相同組換え」の研究をかじりました。隣は篠原彰先生（現・阪大蛋白研教授、ConBio2017 の大会長）の席でした。ちょうど Rad51 をクローニングされ Cell に論文投稿中で、研究室は活気に満ちていました。ただ今ではその分野の面白さがよく理解できますが、当時の自分はあまり出来が良くなく研究を続ける自信が無く、アカデミーに残る選択よりも企業の道を選びました。そして外資系製薬企業の日本ロシュ（現・中外製薬）の研究所に就職しました。ロシュはスイスのバーゼルに本社があり、売上高・ブランド力ともに世界で 3 本の指に入る大企業です。当時は天然物から薬のリード物質を探索するのが世界的に大流行で、私はその研究部署に配属されました。職場は鎌倉にあり、国立大学理系女子の地味な生活から環境は一転し、仕事帰りには湘南のグルメスポットを巡り、週末には江ノ島や茅ヶ崎の海で遊ぶという浮かれた日々で、しばらくは周囲に流されて過ごしていました。ちょうどバブル全盛期で、時代の空気にも影響されていたと思います。しかし肝心の仕事に関しては、薬のスクリーニング実験をこなす日々に戸惑いと迷いを感じていました。そんな中、アメリカのトップサイエンティストが新たに鎌倉ロシュの研究所長として着任され、同時に一流研究者を数人リクルートし基礎研究部門が作られました。私は、たまたまその部署の中山敬一先生のグループに異動となりました。転属先での仕事は細胞周期のブレーキ分子 p27 のノックアウトマウスの解析で、まさに Cell に投稿するタイミングで盛り上がっていて、自分もその一助となるべく実験に励みました。その時、研究に対する自分の考えが偏っていたことに気付き、基礎研究の面白さに目覚めました。ところが論文が無事受理され一息ついた頃、バブルが崩壊してまたもや研究所の体制が急激に変化しました。基礎研究部門は縮小され、同時に中山先生が九州大学にヘッドハンティングされ、グループメンバーの数人も中山先生について行くことになりました。自分は会社に残るかアカデミーに移るかさんざん迷い移動が遅れましたが、最終的に研究で勝負する決心をし、九大・中山研に移動しました。そこは本気で研究に打ち込める環境で、好きなだけ実験が出来て楽しい反面、実績だけが評価基準という厳しい世界でもありました。しかし必死にもがいて努力しているうちに、気がつけば成果もぽつぽつ出始め、論文博士も取得できました。その後、本当は海外留学を希望したのですが、同時期に自分のライフワークに繋がる分子に出会い、「二兎を追う者は一兎をも得ず」という中山先生のお言葉に説得され、そのまま九大で研究を続けることになりました。

当時自分が見つけた分子は FKBP38 というアポトーシス抑制タンパク質で、2003 年に Nature Cell Biology にその機能解析の論文を出しました。実はその論文は Cell のレビューまでまわってリジェクトされた経緯があり、それがとても悔しく、初めて「一生に一度でいいからトップジャーナルに出したい」という強い欲が生まれました。ちょうどその頃私は FKBP38 の結合分子として新規タンパク質を同定しました。その分子は、細胞に発現させると突起が伸びるという不思議な現象を示しました。そこで「突起が伸びる」という意味の protrude という英語より「プロトルーディン」と名付け、その突起形成の分子機構を探ることにしました。ほぼヒントが無い中で「なぜ」を調べるのは簡単ではありませんでしたが、多くの実験を積み重ね、最終的にプロトルーディンが Rab11 と結合し細胞内輸送制御をすることを突き止め、2006 年に Science に報告することができました。ボスの中山先生のご指導に心から感謝しています。

その間、九州大学でポスドク、さきがけ研究者、助手、助教授、准教授を勤め、気がつけば 19 年という長い年月が経っていました。もともと研究が好きでこの世界に入っただけだったので独立欲はあまりなかったのですが、中山研 OB 先輩方に「そんなことではダメだ、ここまで研究や教育を続けてきた私は既に社会的な責任を背負っている」と叱咤激励されました。それがきっかけで真剣に自分の役割を見つめ直し、この度の名市大薬の教授選に応募することになり、採用していただいて今に至ります。

このように、私は研究者・教育者への正統派の道はたどっておらず、多少紆余曲折のある独自の道を歩いてきました。ただそれは必ずしもマイナスでは無く、そのおかげで逆にオリジナルで多彩で充実した体験ができたとも思います。そして、道は 1 本に決まっているわけでは無く人それぞれだということを、身をもって学生に教えてあげられるかなとも思います。

これまでの長い研究生活の中で、生命科学全般について広く深く勉強してきましたし、後輩もたくさん指導させてもらいましたし、中山研の番頭として研究室のオーガナイズも任せてもらってきました。本当にありがたい経験を積ませていただきました。これからはこれらの豊かな経験を生かし、ここ名古屋市立大学大学院薬学研究科で、学生・院生の研究と教育に全力を注ぎたいと思っています。ご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願いいたします。